

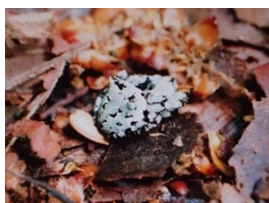
地衣類

1. 利用する動物

地衣類は菌類の菌糸の間に藻類が共生している生き物です。地衣類を食用とする動物としてトナカイが有名ですが、岸壁に生えるイワタケは人も食べています。食用だけでなく、地衣類を擬態の対象とする動物はたくさんいます。



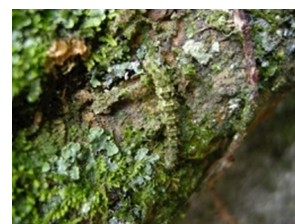
コマダラウスバ
カゲロウの幼虫



コケオニグモ

最も多いのは昆虫のガの仲間の利用です。コケガやコヤガという小型のガ類の幼虫は、食用とする以外に地衣類に似せた体をしたり、地衣類を体にまとったりしています。動かなければ、まず存在に気づかれません。蛹や成虫も地衣類に擬態している種(No.107、49参照)があります。地衣類の中では分かりづらいため、右上の写真以外はあえてわかりやすいものを選びました。

昆虫だけでなくクモにもトタテグモのように地衣類を巣に貼りつけるもの、コケオニグモのように体色を似せるものがあり、鳥類のエナガも巣(No.27参照)に貼り付けます。分類群が異なっても同じことを行っているのです。



コヤガの仲間の幼虫



左：シラホシコヤガの幼虫
右：ゴマケンモンの成虫

2. 環境指標

樹幹にはいろいろな地衣類が付着しています。打吹公園のソメイヨシノには葉状地衣類とよばれるウメノキゴケの仲間(No.20参照)や他の地衣類がいろいろみられます。

樹幹の地衣類を見ながら、打吹山に登ってみましょう。高木の下には葉状地衣類がなく、薄く張り付いたような白っぽい地衣類しか見られません。これは痂状地衣類とよばれる「かさぶた」をイメージした仲間です。幹の太い樹はシイ類、タブノキ、ツバキ、シラカシ、イヌシデ、モミが主です。シイ、モミはソメイヨシノのように幹肌が荒いのですが、公園のソメイヨシノのように葉状のウメノキゴケの仲間は見られません。ヤマザクラもあるのですが、やはり葉状地衣類の付着はありません。



コアカミゴケ

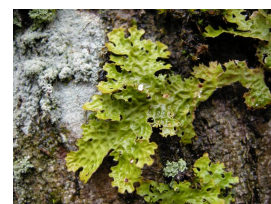
地衣類にはもう一形態、樹枝状のものがあります。ソメイヨシノにみられる小型のコアカミゴケは、胞子を作る子器が赤くなる冬に目立ちます。地衣類は共生する菌類と藻類を含む体の一部が粉状にちぎれて飛散することでも繁殖します。これらは付着した幹で成長していくのですが、樹皮がはがれやすい幹では生育できません。サクラでも植樹から10年近く経たなければ、ウメノキゴケがつかないようです。

頂上ではまた様子が変わります。葉状で大型のカブトゴケの仲間であるヘラガタカブトゴケがスダジイの幹に着生しています。山地性の種です。標高200mで出現したと思われます。

公園域でもツバキにはウメノキゴケが着生していませんので、幹肌は関係あると思われますが、光の強さが地衣類の分布におおいに関係していると考えられます。林縁だと幹の日向側と日陰側で着生地衣類の量が異なっています。



痂状地衣類



ヘラガタカブトゴケ